

平家納経の歌絵と芦手

— 梁塵秘抄による今様の歌 —

《キーワード》歌絵 芦手 平家納経 梁塵秘抄 法華経

白畑よし

平家納経はなぜ梁塵秘抄の歌によったか、長寛二年（一一六四）平清盛は厳島社に法華経寄進（清盛願文による）

厳島神が今様を好んだということは梁塵秘抄口伝集に清盛の女建春門院と後白河帝が共に承安四年（一一七四）厳島社に参詣した時の話にその折社の巫女（神と同一視される）が今様歌を歌ってほしいと所望した。帝は先ず側近の今様の名人に仰せ付けたが、恐れをなしてふるえて声にならない。それで後白河帝が今様を唱われたことよって、厳島神は今様を好まれたというのに基づくのであろう。それにちなみ、平家納経の歌絵・芦手は梁塵秘抄の歌によったと推察される。

平家納経見返及本文の下絵

芦手及び歌絵について

一、芦手見返し 方便品「秋の汀の景」

梁塵秘抄、法華経二十八品の歌五首のうち

「われらが宿世のめでたさは、釈迦牟尼佛の正法にこの世に生まれて人となり、一乗妙法聞くぞかし」

「われらが宿世」は丘の上の楓の二樹が「われら（我等）各々の樹の幹が二股に分かれて私たち」となる。宿世はその楓の二樹の上方がたがいにかみ合っていることの意味で「夫婦の縁を結ぶ」ことは前世の因縁であるが（さらに釈迦牟尼佛と縁を結ぶこと）「めでたさ」は楓樹の下方に芽が出ていること、「釈迦牟尼佛」は蛇籠じやかご—しゃかご—は釈迦御と判ずる（御は親愛を示す呼び方。例えば…親御という呼び方）。「正法」は蛇籠は川床が流水に崩れなように保全をする意味で「床保」と語呂をあわせる。「この世に生まれて人となり」は板子の上方の芦手文字が蘆の節の間から出て「人外なり」蘆の節の間を「よ」という、つまり世と芦

手文字で判じさせる。「一乗妙法」は板子にかけり、一人乗って舟の上に横に渡しながら舵をとって舟を進行させる船頭にあて、その便利な方法は「妙法」という意味になる。また板子の上に一本の蘆が乗っている意味とも合わせて示す。「聞くぞかし」は板子は「木具」なので語呂を合わせる。「かし」は下方にある芦手文字にかかるとか、或いは「妙法は」板子の傍らの水流に散る紅葉の美しさに自然の妙を暗示するのかを思わせる。

二、分別功德品見返し歌絵

絵は池汀に蓮華が咲き、四人の老(尼君)若男女が集う。空には二列に並ぶ雁が飛び行く。

梁塵秘抄、法華經二十八品の同品の歌三首のうち

「法華經持たん人はみな起きても臥してもこの品を常に説き読み怠らで、塔をたてつ、拝むべし」

法華經はほんやりと座っている姿の公卿に判ずる。つまりほんやりは古語で「ほうけ」というので「ほうけ卿」「法華經」と語呂合わせとなる。「持たん人」とは傍らに坐る三人の女性達で、この人たちは公卿に生活を護られていることで、つまり保護されているので「持たん」と判じる。「起きても臥しても」は、前景にある岩・石に高い形のものど低い形のものがあり、高い方は「起き」低い方は「臥し」となる。「この品」は芦手文字「あ」と、その傍らの石上に静止している鳥が「止」と判じられる。「常に説き読み怠らで」は空を飛び行く雁に意味をかける。雁は常に列が乱れないように、

怠らず飛行する性能の意味を通じさせる。「塔をたてつ、」は池中の蓮華のうち、花と葉が十本直立してのびていることにかかり、「塔(とう)たてつ」と意味させる。(仏教で塔をつくって拝むことは功德となるとされている)「拝むべし」は女性の人物中尼君が数珠を手にしているのに拝むとかける。また蓮華は仏の象徴であるので「拝むべし」と解釈させるか。

三、妙莊嚴王品見返し歌絵

絵は流水に瓶と経巻が流れ、二羽の鷺がいる。鷺はもう一羽流れに向かつて飛んでいる(合わせて三羽の鷺)。二人の美姫が渚にいて相對して光明に向かつて合掌する。美姫の前には蓮花の蕾を描いた扇が広げている。

歌は梁塵秘抄、法華經二十八品の同品四首のうち

「釈迦のみのり(御法)は浮木なり。参り合ふ我等は亀なれや、今は当来彌勒の三会の暁疑はず」

「釈迦の御法」は水中の経巻で、それを浮木に転じさせる(仏教の有名な言葉に「盲亀浮木」という譬えがある。仏にはなかなか逢い難いことの譬えことばで、当品の経意の中に盲亀が大海でつかまる浮木をさがしても、なかなか見当たり得ない意味になる)。

「参り合ふ我等」は合掌して向き合う美姫たちであり、「亀なれや」は水に浮く瓶(「かめ」という)にかける。「今は当来」は扇が十骨あるので、扇と蓮華の蕾にかける。以前の扇は五、六骨であったが今は十骨のものに変わったことを意味させる。つまり十折にたたむ

ので十に蕾が、つぼむとなる。(平家納経作成以前の絵画である扇面法華経の下絵に見る扇は六骨である)

「彌勒の三会の暁疑はず」は衆生の救世主である彌勒菩薩は、釈迦滅後五百年は仏が不在とされていたのが、再び現れるという仏である。そしてこの彌勒はいつも暁に疑いなく三回姿をあらわすということ。「彌勒」「三羽の鷺が来る三鷺来で」みろくと語呂合わせとなる。暁は天よりの光明になり、「疑わず」は蓮弁が転々と舞いかわすことに判じる。なお当経巻には表紙の画中や界上下にも梁塵秘抄歌によるあしで文字が見られる。

四、提婆品本紙(経文のある面) 下絵

絵様 柳に小鳥がとまっている。その他に橋の実が(四十六個の内)点々とある。経文の界上に粟の餌器と鶴、少し離れてゆり鶇(都鳥)。なお「鶴に粟」のたとえがある。

歌 梁塵秘抄、雑法文歌の内

「切利の都の鶯は疇定めでさぞ遊ぶ、浄土の植木になりぬれば、花咲き実なるぞあはれなる」(切利天は六欲天中の下から二番目の天、須弥山の頂上にある(帝釈天の住所))

鶴は鳥を代表し、鳥とたたいえば鶴のことである。「切利」は「鶴」、ゆりかもめは都鳥とも呼ばれるので「切利の都」に通じさせる。鶯は疇(ねぐら)の本来は梅木であるが、その梅木を離れて柳の木で遊んでいる。「浄土の植木」は柳でそれに花が咲き実がなるのは仏の慈悲で、あはれと(賞賛される)のである。「花咲き」は柳の

枝先が二つに割れているのかかり、「実なる」は「橋の実」にかかるとなる。なお、「浄土」は天は浄土であり、柳の下の土坡の一部が白くなっているのに示されているようである(仏事の折に着る白衣を浄衣と呼ぶ例がある)。(以上は先に知人に對して口述したものである)

〔附記〕

平家納経が梁塵秘抄の法華経歌と関連のある例は以上のような芦手・歌絵の他にあり、先に亀田孔氏によって『平家納経』(奈良国立博物館刊)に記載されている。宝塔品紙背芦手文様中に「長者我」の文字は梁塵秘抄法華経二十八品歌譬喩品の「幼き子供はいとけなし、三つの車を乞ふなれば、長者は我子の愛しさに白牛の車ぞ与ふなる」の文句である。

○法師品見返しには梁塵秘抄法華経普賢品に「草の庵の静けきに持経法師の前にこそ、生々世々にも値ひがたき普賢薩埵は見えたまへ」に通じる

○寿量品(経文字)の月輪の山端より出るのは、梁塵秘抄雑法文歌の「婆羅や林樹の木の下に帰ると人には見えしかど靈鷲山の山の端に月はのぞけく照らすめり」と釈迦が山に常住していることになぞらえての表現か。

○「一心欲見物、不自惜身命、時我及衆僧俱出靈鷲山 我時語衆生 常住此不滅」

○同妙音品 日輪の山端に出現は、梁塵秘抄、法華経二十八品歌、妙音品「わが身一つはさて居つ、十方界には形分け、衆生あまね

く導きて浄光国には帰りにし」浄光国（妙音菩薩の本国）一切浄光
莊嚴国（日輪を意味する）経文中「釈迦牟尼佛の光、その身を照ら
したまふ、是の菩薩の目は廣大青蓮華の如し、たとひ百千万の月を
和合せんも、その面貌端正なること復此に過ぎんや、身は真金の色
にして……」妙音菩薩はそのままその場にいながら十方界（東
西南北、東北、東南、西北、西南、上、下の十方）に身を分けてそ
の本国に帰った……



法華經方便品第二 見返



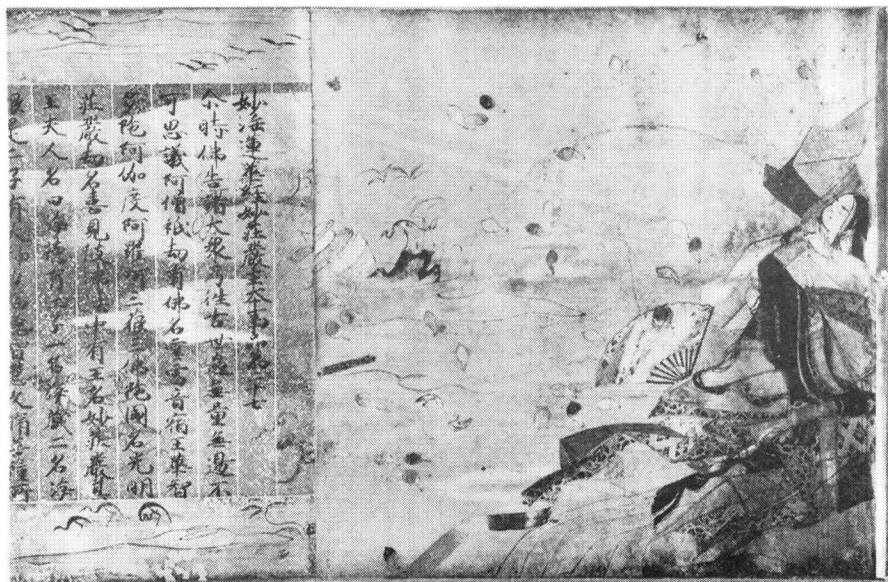
同 上 (部分)



同 上 (部分)



法華經分別功德品 第十七 見返



法華經妙莊嚴王本事品 第二十七 見返



法華經妙莊嚴王本事品 第二十七 見返 (部分)



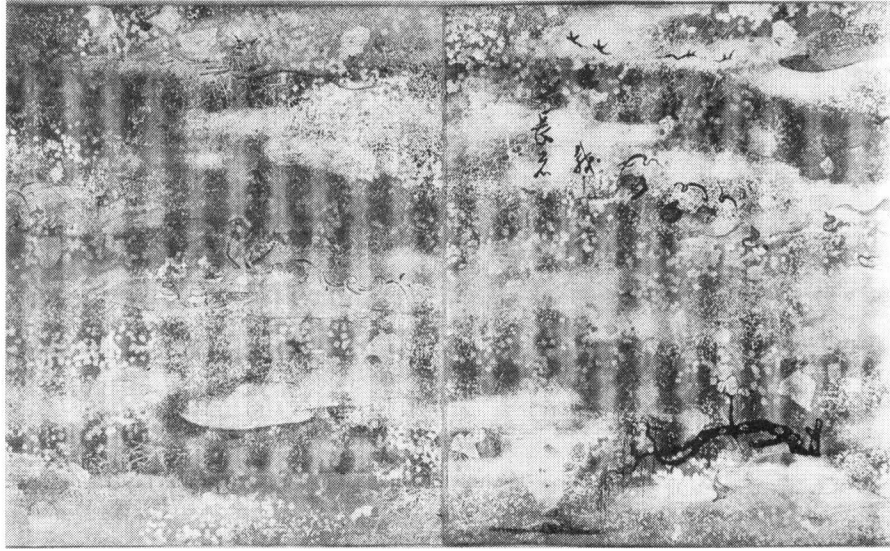
法華經妙莊嚴王本事品 第二十七 見返 (部分)



法華經提婆達多品 第十二 本紙表



法華經提婆達多品 第十二 本紙表



法華經見宝塔品 第十一 本紙裏



法華經如來壽量品 第十六 本紙表



妙法蓮華經法師功德品第十九
 見返
 尔時佛告常精進菩薩摩訶薩
 若男子善

法華經法師功德品 第十九 見返



名曰妙音久已頌眾德奉供養親近無量百
 千萬億諸佛而悉成就甚深智慧得妙性相
 三昧法華三昧淨德三昧宿王藏三昧無障
 三昧智守三昧解一切眾生活語言三昧集
 切功德三昧清淨三昧神應莊嚴三昧惠
 三昧莊嚴三昧淨光明三昧淨藏三昧不
 共三昧日鏡三昧得如是等百千萬億恒河
 沙等諸大三昧淨妙音佛先詣其身叮
 淨摩宿王智佛言世尊我當住諸婆娑世界
 孔佛親近供養釋迦牟尼佛及見文殊師利
 法王子菩薩摩訶薩王菩薩摩訶薩宿王菩薩
 摩訶薩上行意菩薩摩訶薩王菩薩摩訶薩今時
 淨摩宿王智佛告妙音菩薩汝莫輕彼國生
 下劣樹善男子彼娑婆世界高下不平山石
 諸山嶺是充滿佛身小諸菩薩眾其說亦
 小而汝身四方二千由旬我身六百八十萬
 由旬汝身第一端正百千萬福光明殊妙是
 故汝注身彼彼國若佛若僧及國土生下方
 想妙音菩薩白其佛言世尊我今詣娑婆世
 來皆是如來之力如來神通遊戲如來功德
 智慧莊嚴於是妙音菩薩不起于座身不動

法華經妙音菩薩品 第二十四 本紙表